

行為動詞「やる」の俗語性

大 塚 望

1. 行為動詞「やる」

「やる」という動詞には様々な用法があり、一つには授受動詞、一つには移動動詞¹⁾、そして一つには漠然たる行為を表す行為動詞としての姿がある。そもそも動詞とは、動作・行為²⁾を表し、文の述語となり、語形変化する単語のことである。その意味では動詞はすべて行為動詞であり、その動作・行為がどのような内容を持つかということは、その動詞自体が語彙的な意味として持っている。例えば、「食べる」であれば「食物をかねでのみこむ」動作を示している。したがって、動詞は「特定の」動作・行為を表すという意味において行為動詞であるのが一般的である。しかし一方で、そのような特定の動作・行為を示さない動詞が存在する。その典型的な例が「する」である。動詞自体は動作・行為であることを示すに過ぎず、それがどのような動作・行為であるかはその他の要素によって決定されるのである。そして、「する」と同様に漠然と行為であることのみを表す動詞に「やる」がある。本稿では、このような「やる」を取り上げることとする。

「やる」は、上記のような授受動詞、移動動詞という通常の実質的意味を持つ動詞としての姿と、「する」のように専ら文法的な機能を担う動詞としての姿がある。本稿では、特に後者の側面、つまり動詞一語ではその動作・行為を特定できないという側面を取り上げ、「する」の俗語であると言われる「やる」の俗語性について考察する。なお、授受動詞や移動動詞との混乱を避けるため、以上のような「やる」を特に行為動詞「やる」と呼ぶことにする。

2. 俗語

2.1 「やる」俗語説

一般的に行為動詞「やる」は「する」の俗語とされ、そのためか研究対象とし

て取り上げられることも少なかった。これまで、両者の意味・用法の違いという観点からいくつか論考を示してきた（拙稿1999, 2002）が、その結果「やる」には「する」の俗語であるというだけでは済まされない独自の意味・用法があることが明らかにされた。

しかし、そもそも『やる』は『する』の俗語である」という一般論が正しいのか否か、この根本問題に立ち返り検証する必要がある。俗語であるからには文体としての違いが認められつつ意味的には同じでなければならないが、その実態があるのかどうか。あるいは、「する」の俗語としてではなく、「やる」独自に俗語であるとされる面があるのかどうか、この二点を行為動詞「やる」の俗語性という観点から考察したい。

まず、「やる」が「する」の俗語と言われる点について、辞書の記述から確認する。以下に、「やる」を見出しとする項目についてまとめて載せる（カタカナは筆者が付したもの）。

- 【やる】：ア. ある動作や行為をする。「する」よりも俗な言い方。（日国大）
（国語大）
：イ. する。行う。「する」「行う」よりも俗な言い方。（言泉）
：ウ. する。行う。〔種々な行為に関して、ばくぜんと言う。多少品のない言い方〕（新国語）
：エ. みずから（進んで）する。「する」の乱暴な（またはそれに近い）言い方。（岩波国）

これらの辞書の記述を見ると、「やる」は「する」よりも俗な言い方であるとされ、「する」の俗語であると捉えられていることが確認できる。辞書に記載されているということは、行為動詞「やる」が「する」の俗語的な言い方として一般的にも認識されていることがうかがえ、「やる」俗語説があることがわかった。

2.2 「やる」—俗語としての二面性—

次に、それでは俗語とはどういう概念であるのか。以下に、同様に辞書の説明を載せる（カタカナは筆者が付したもの）。

- 【俗語】：オ. ①詩歌、文章などに用いる文字ことば（雅語）に対して、日常の話しことば。②標準的な口語に対して、あらたまった場面で

は用いられないようなくだけたことば。(日国大)

：カ．くだけたことば，卑俗なことば。「雅語」「文章語」に対して日常普通に用いられる語。(大百科)

：キ．①文章語や雅語に対して，世間で日常的に用いられる言葉。口語。②あらたまった場面では使われないような卑俗な言葉。スラング。(大辞泉)

俗語あるいは俗とは，一つは「話しことば」を指し，もう一つは「卑俗さ」を指していることがわかる。つまり，「やる」が「する」よりも俗な言い方，あるいは「する」の俗語であると言うとき，「やる」は「する」よりも話しことば的であること，また，「する」よりも卑俗なことばであること，の二点を意味することになる。

この「話しことば性」と「卑俗性」を「やる」の俗語性と捉え考察を進めることとする。ちなみに，先行研究には「やる」が「する」の俗語であることを検証したものは見られない。この俗語としての二面性の検証と，そして，「やる」との比較によって見られる俗語性とは別に，前述した「やる」単独での俗語性も考察に入れ，以下のように考察の観点をまとめる。()内はそれぞれの俗語性が関わる「やる」の辞書記載個所を示す。

〈「やる」の俗語性〉

- ①話しことば性(ア，イ)→「やる」は「する」よりも話しことば的である。
- ②卑俗性(ウ，エ，オ，カ，キ)→「やる」は「する」よりも卑俗なことばである。
- ③「やる」独自の俗語性(辞書記載なし)→「やる」だけに見られる俗語性。

3. 俗語—話しことば性—

3.1 話しことば性を測る

俗語性の一つとして，「やる」が話しことば的であることがあげられたが，このことを検証する方法には二つあると考えられる。一つは，話しことば資料を用いる方法であり，もう一つは書きことば資料を用いる方法である。前者の方法では話しことば資料を調査対象とし，そこで「やる」が頻出するのを確かめられれば話しことば性が強いことが推測される。また，後者の方法では書きことば資料

を調査対象とし、そこで「やる」が稀出であることが見とめられれば書きことば性の弱さ、ひいては話しことば性を有することが推察されるはずである。「やる」が日常の話しことばで使われるものであるならば、逆に書きことばでは使われにくいということになるからである。今回は後者の方法で検証を試みる。

調査においては、新聞記事を書きことば資料として取り上げる。具体的には朝日新聞記事のデータベースを用いた。今回の調査では、朝刊、発行社東京、本紙を用いる。そして、検索する紙面は内容の偏りを避けるためと、より話しことば性の強い内容を目指して報道記事が中心となっている、総合記事³⁾を扱う第二総合面とした。調査対象は2005年3月1日から3月31日までの1ヶ月分である⁴⁾。

3.2 新聞記事の言語的性質

検証の前に、新聞記事の言語的性質について先行研究を踏まえ考察する。

これまで、話しことば・書きことばとは何かという観点から両者について、いくつかの考察がなされてきた。特に話しことばへのアプローチが多いが、その中で大石初太郎(1956)は言語行動に着目し(1)原産の別(2)即席・なぞりの別(3)本来の別、の三つの観点から話しことばを類別している。また、南不二男(1996)は(1)初期状態(2)現在状態(3)志向目標(4)構造特性の四つの指標から、その性格を把握しようと試みている。いずれも話しことばの性質を抽出する有効な観点、指標となっている。

そこで、大石(1956)の類別を書きことばに応用すると、(1)文字原産(2)なぞり(3)本来読ませることばである、の特徴を有するものが書きことばということになる。新聞記事を振り返ってみると、もともと文字であるという点(1)、即席ではなく何度か考察しながら書き進めた結果であるという点(2)、本来読ませるためのものであり、実際に読み物であるという点(3)から、かなり話しことばの性質は強いと言える。

また、南(1996)には「どう見ても話しことばと関連があるとは認められないものもある。{字字文文}の場合がそれで、はじめから黙読されることだけを想定して書かれた記事、論文などがその例である」との記述がある。{字字文文}とは、(1)初期状態、最初から文字である、(2)現在状態が文字である、(3)志向目標、目指すスタイルが文章語的である、(4)構造特性が文章語的である、ということである。この点でも新聞記事は書きことば資料として適当であると考えられる。

次に、さらに書きことば性質の強い資料を調査対象とするために、意見や論考

あるいは投稿などの記事は避け、報告記事が中心と考えられる紙面を選択した。それが第二総合面である。

したがって新聞記事は、媒体が文字であること、黙読を前提に書かれてあり、目的が読み物であること、また同じ書きことばであっても小説やシナリオなどに比べると内容的に硬いこと、さらには新聞であるという点で公共性、標準性、規範性なども帯びている。以上の点から、新聞記事は、書きことばの性質を強く持つものであり、調査対象として「やる」の俗語性を検証するのに適した資料だと考える。

3.3 話しことば性の強さ

新聞記事を調査対象とし、「やる」についてはその活用形「やる」「やった」「やって」「やろう」「やらせ」「やらな」「やり」「やれ」を検索した。その結果、これらの使用が見とめられたのは記事にして35件あった。そのうち今回の調査に該当しないもの（例、てやる、やりとり等）を省くと30件となる。そして、各記事を一つ一つ確認したところ、30件の記事（述べ数）に「やる」動詞を用いた用例は30例（述べ数）で、一つの記事に1例ずつしか見当たらなかった。総記事数が180件（異なり数）であり、記事の長さは長いもので3000字強、少ないものは130字程度であるが、記事件数と字数を考えると「やる」の出現率がかなり低いことがわかる。

次に、これら30例の「やる」の用例には共通した点が見られた。それは、用例のすべてが会話文中に出現することである⁵⁾。新聞記事は書きことば資料であるが、その中でも会話の箇所は話しことばを書き取って表現したものと捉えることができる。三尾砂（1942）も「文字に書きあらはされた言葉でも、小説の中の会話部分や脚本の会話部分など、つまり話言葉をそのまま文字に書きあらはしたものは、もちろん話言葉（かなり書言葉化されてゐますが）であります」と述べているように、会話部分は書きことばの中に現れる話しことば性質を示す箇所と言える。

さらに「やる」の例のうち、漠然とした何らかの行為として「する」と置き換え可能だと考えられる例を抽出してみた。その結果27例が見られた。これは、「する」に置き換えられるにもかかわらず「やる」を使っている表現であり、いずれも会話内に出現している。つまり、会話という話しことば性質を示す環境に「する」ではなく「やる」を用いているということであり、「やる」の話しことば特徴を示していると考えられることができる。

ちなみに、「する」を同様に検索すると、824件の記事（延べ数）が出力され、一つずつ記事の中身を確認し用例数を数えた結果、2406例（述べ数）が見られた。そして、「やる」に置き換えられると考えられる例は42例あったが、やはり新聞記事の報道記事という書きことば性質の強さに応じて、「やる」ではなく「する」が使われたと考えられるものであった。

以上、書きことば性の強い新聞記事、しかも総合面という報道記事を対象にして調査を行った結果、総記事数180件のうち「やる」の出現する記事はわずかに30件であり、その用例数も30例と極めて少数であった。また、その出現箇所がすべて「会話文」中であることに特徴が見られた。したがって、この二点から俗語性の一つである「話しことば」性質が「やる」に強く見られることがわかる。一方で、新聞記事、特に報道記事（会話ではなく地の文）に現れないということは、「やる」の書きことば性質の弱さを示すものであろう。

4. 俗語—卑俗性—

次に、もう一つの俗語の意味である「卑俗性」について考察する。『日本俗語大辞典』（2003）には「やる」と「する」に関する記載として以下のようなものが見られる。

【やる】：「やられた」「やりー」「やるー」「やったー」「やっちまえ」「やる①
性交する②殺す。いためつける。③酒を飲む。食べる。」「やらかす」

【する】：「しでかす」

【する】【やる】混合：「してやったり」「してやられる」

また、国語辞典などで俗語であると明記されていたものもあった。

【やる】：（俗語で）危害を加える。（大辞泉）

：男女が肉体的に交わる行為をする。卑俗な言い方。（言泉）

この他に拙稿（1999, 2002）でまとめた「やる」の意味・用法を参考に、卑俗性つまり「下品な乱暴な、公では用いられない（用いにくい）」意味・用法を探してみる。すると、以下のような俗語としての用法を加えることができよう。

喫煙（一服やる）

悪習となる嗜好（覚せい剤をやる）

病気の経験⁶⁾（大病をやる，はしかをやる）

加害行為〈殺す，痛めつけるなど〉（あいつをやる）

被害行為〈だます，詐欺，スリなど〉（財布をやられた）⁷⁾

更に、「やってらんねー」「やってられっか」のようなマイナスの感情表現⁸⁾にも使われる。以上から「やる」が，俗語の性質である卑俗な用法を持つことがわかる。

一方，「する」は上記の辞典には「しでかす」が一例のみ挙げられているだけで，「やる」に比べるとその例は極端に少ないと言える。「する」は卑俗な意味・用法がほとんど見られないということになる。

5. 「やる」独自の俗語

話しことば性という観点では，「やる」にその性質が強いことがわかった。しかも「する」と「やる」が置き換え可能な表現がその中に見られたという点から，「やる」は「する」の俗な言い方という点が確認されたことになる。話しことば性という俗語の側面については，「やる」独自の俗語性は見出すことはできない。話しことばか書きことばかという性質はどの言語要素も持つものであることを考えれば当然の結果である。

残るのは「卑俗性」という俗語の側面において，「やる」独自の性質が見られたかという点である。それについては前節でも取り上げたが，一つには「危害」の用法，「マイナス感情」の表現などが「やる」独自の俗語性だと言える。一方，「する」が卑俗性の点でその用法がほとんど見られないことを考えると，「やる」は「する」とは関わり無く，俗語的な側面を強く持っているということである。したがって，「する」は「やる」よりも俗な言い方と言うとき，厳密には「やる」は「する」よりも話しことばという性質を強く持つという点で，より俗な言い方であるということである。しかし，卑俗性という俗語面ではむしろ「する」の持ち合わせない独自の俗語性を「やる」が示すということができ，その点は「やる」単独の俗語性の強さとして特記すべき点である。

このように行為動詞「やる」は，より汎用な「する」という動詞に隠れていたが，「する」と比較の上で見られる単なる文体差と言うだけには留まらない，一つの動詞として「する」とは異なる俗語性を示す動詞なのである。

6. まとめ

以上、行為動詞「やる」の俗語性について(1)話しことば性、(2)卑俗性、の二点から検証を行った。その結果、(1)については新聞記事の調査から「やる」の話しことば性質の強さが、その出現数の少なさと出現箇所が会話文中であることから検証された。また(2)については、様々な卑俗な用法の存在から「やる」の卑俗性という性質が検証された。そして、それが「する」との比較の上で述べられるものではないことがわかった。

今後の課題としては、新たに話しことば資料を用いた「やる」の俗語性と「やる」独自の振る舞いについて調べていきたい。

注

- 1) 移動動詞とは位置の変化を表す動詞として、「行く、来る、上がる、下がる」などを指す。「やる」も「机を窓際にやる」「部下を得意先にやる」「目を外にやる」など位置の変化を表すので移動動詞とした。
- 2) 動詞には、存在を表す動詞もある。しかし、動詞全体の中心的な役割はやはり動きを表すということであり、動作という語彙的意味によって範疇化されていると考えられる。
- 3) 具体的には「时时刻刻」「ひと」、教育政治社会科学関連の記事などが見られる。
- 4) 一月分の新聞記事は量的にはまだ不十分である可能性はあるが、出現の傾向性(つまり多いか少ないか)という点は検証できると考えた。また、「やる」が何月かという季節や時期に偏りがあるとは考えにくいので無作為抽出にはせず、最近の一月を対象とした。
- 5) 今回の調査では、すべての「やる」が会話文中に現れるという結果となったが、調査の分量を増やせば会話文中以外に出現するものもあるかもしれない。いずれにせよ、「やる」が新聞記事特に書きことば性の強い地の文に出にくいということは確かである。
- 6) 病気の経験の場合、「大病をやる」「はしかをやる」はそれぞれ「大病を経験する」「はしかをすませる」などの、より正式さ、丁寧さなどが上だと思われる表現があり、この意味で公さにおいて低いのが「やる」である。
- 7) 「あいつをやる」は「あいつ」を「殺す、痛めつける、殴る…」の意味しか持たず、そこに「だます、詐欺、スリ…」の危害行為の意味は出ない。しかし、後者の行為は被害行為として「財布をやられた」など受身の形で種々の被害を表し得るものである。
- 8) 「やる」の表す感情表現としては、他に「やるね」「やった」「やってやる」などがあり、達成、遂行などを表すプラスイメージの表現もある。「卑俗性」という側面を捉えるならばマイナスイメージの感情表現が入り、プラスイメージの感情表現は「話しことば性」の方に入れられるものかもしれない。

〔参考文献〕

- 大石初太郎（1956）「話しことばとその研究」『国語学』24（『話しことば論』（1971）秀英出版，再収）
- 大塚望（1999）「『する』と『やる』—生理・病理現象の表現を中心として—」『言語学論叢』18筑波大学一般・応用言語学研究室
- （2002）「『する』と『やる』—非動作性名詞がヲ格に立つ場合—」『日本語科学』12独立行政法人国立国語研究所
- 三尾砂（1942）『話言葉の文法』帝国教育会出版部
- 南不二男（1996）「話しことばの研究と各種資料の性格」『日本語学』15.4明治書院
- （岩波国）『岩波国語辞典』第六版（2000）西尾実，岩淵悦太郎，水谷静夫編 岩波書店
- （新国語）『学研現代新国語辞典』改訂第三版（2002）金田一春彦編 学習研究社
- （国語大）『国語大辞典』第一版新装版（1988）小学館
- （言泉）『国語大辞典言泉』（1987）小学館
- （大辞泉）『大辞泉』（1995）小学館
- （日国大）『日本国語大辞典』第二版 第8巻（2001）第13巻（2002）小学館
- （大百科）『日本大百科全書』小学館

朝日新聞<http://dna.asahi.com>

（おおつか・のぞみ，本学専任講師）